ISSN 1346-8057 2013年9月30日発行　13巻2号（通巻25号）

日本語文法

13巻 2号 2013年9月

シンポジウム 発表論文

わたしたちは新しい文法をどう学ぶのか　大関　浩美　3
——第二言語習得研究からわかってきたこと——

こどもの『誤用』はなぜ生じるのか　村杉　恵子　19
——幼児の言語獲得における普遍文法の役割——

研究論文

日本語における連体修飾関係の反転現象　小松原　哲太　37

現代語における状況を表す「～（の）中を」「～（の）中φ」について　佐伯　暁子　54

同一語のくり返しが集中する文章構造の特徴　鯨井　綾希　71
——BCCWJ特定目的サブコーパスの「教科書」を例として——

二つの主部内在型関係節構文　伊藤　創　88
——産出の動機づけから見た同構文の分類と成立条件——

沖縄県首里方言における使役文の意味構造　當山　奈那　105

「ト見ラレル」の推定性をめぐって　志波　彩子　122
——ラシイ，ヨウダ，（シ）ソウダ，ダロウとの比較も含め——

「わけにはいかない」の意味用法　那波　理絵　139
——「不適切」と「不可能」の近接性——

研究ノート

言い切り文による命令と禁止　森　篤嗣　155
——小学校授業場面における学習言語の文法的側面——

低評価を表すナンカと否定極性表現anyの類似性　畠山　雄二・本田　謙介・田中　江扶　164
——日本語と英語の対照研究——

会則／役員・委員／入会案内／投稿要領／査読要領／活動報告　172

第14回大会プログラム／事務局からのお知らせ　190

編集・発行 日本語文法学会 | 発売 くろしお出版

こどもの『誤用』はなぜ生じるのか
――幼児の言語獲得における普遍文法の役割――

村杉　恵子（南山大学）

要旨

幼児は無意識に普遍文法の道を辿る。言語獲得途上，幼児が自ら，普遍文法に基づいて，母語とは異なる自然言語に許された文法値を試す段階がある。それは，言語の普遍性と多様性を映し出す。本稿は「原理とパラメターの理論」の枠組みで，幼児言語の事実と言語の多様性が，いかに説明されうるのかについて概観する。本稿では，主節不定詞現象や動詞の自動詞・他動詞の『誤った』交替などの日本語を母語とする幼児に観察される典型的な誤用をとり上げ，これらの文法的誤用が，単なる『間違え』ではなく，自然言語に存在する普遍文法の範囲内で規定された(母語以外の)文法の特性が表れる段階とする分析を提案する。

キーワード：普遍文法，文法獲得，主節不定詞現象，自他交替，過剰生成

Linguistic Universals and Language Variation:
Evidence from Child Japanese

MURASUGI Keiko (Nanzan University)

Abstract

The basic concept of principles-and-parameters theory within generative grammar is to investigate aspects of the invariants of human language (the principles) and the major points of cross-linguistic variation (the parameters). This paper argues that the child's acquisition path can go through Universal Grammar options found in other languages based on the analysis of such typical "errors" that Japanese-speaking children produce as Root Infinitive Analogues and Transitive-Intransitive Alternations.

Keywords: Universal Grammar, Language Acquisition, Root Infinitives, Transitive-Intransitive Alternations, Overgeneration

1. 幼児の『誤用』から見る普遍文法

幼児が言語を話すのはとても平凡なことに見える。人は，知能指数や人種，親の社会的地位にかかわらず，生後わずか数年で，母語の文法を獲得する。幼児は，親から具体的に教わらずとも，はいはいをし，つかまり立ちをし，そして歩き出す。言語もまた，当たり前のように獲得される。人は，なぜ，短期間に等質の言語知識を獲得できるのだろう。

不思議なことに，幼児は言語を獲得する過程で，大人の文法とは異なる言語表現を，発話することがある。「うさちゃん食べてる*のにんじん(うさぎが食べているにんじん)」，「意地悪な*のおばちゃん」など周囲から笑顔で受け止められては忘れられていく『幼児の誤用』は，常識的でわかりきったと思われる事柄であり，日常茶飯事のことのように見える[1]。

しかし，中には，ことばの専門家ではなくともわが子の『誤用』にふと立ち止まり，不思議を感ずる人もいる。たとえば，2歳0ヶ月の幼児を持つ友人は，こんな素朴な観察と感想を2012年8月のフェースブックに掲載していた。

(1) a.　今日の月をみて，「お月様半分に切ってるなぁ」と言っています。
　　b.　草を食べている犬を見て「犬が野菜食べてるなぁ」と言っています。子供の表現は面白い。

自然科学は，一見，当たり前に見える事象について「これはなんだろう」と問う視点にはじまり，それが「なぜ起きるのか」を問い，その解明にむけて理論的実証的研究を行う。大人も産出しない(幼児に入力されない)文を，なぜ幼児は，自発的に発話するのだろう。なぜ幼児の発話に文法的誤用が観察されるのだろう。

生成文法理論は，自然界の一部である人間の脳に在ると想定される言語を，いかなる機能が司るのかを解明しようとしている。その抽象的な機能が人間の多様な言語現象を説明しうるか否か，さらには，それがどのように説明しうるかを検証する試みである。生成文法理論の下では，文法とは，人間という種にのみ与えられた人間の生物学的な特性であると考えられている。

[1] 幼児の誤用は，さまざまなレベルにおいて起きうる。たとえば，構音について，2歳前後の幼児が，「自分で」を「ぶんじんで」，「さかきばらゆうきくん」を「さきからばゆうきくん」といった具合に挿入や転換をする現象もよく知られているが，本稿では，いわゆる文法に関する『誤用』に焦点をおく。

人間の生物学的特性は，経験に基づいてのみ学習されるものではない。人間は，ありとあらゆる言語の話者になりうる文法のメカニズムを持って生まれ出ずる。幼児は，生まれた環境の下で，直接的な言語教育を受けることもなく，生得的に与えられた言語獲得装置に従って，自ずと母語の文法体系を獲得する。言語経験の中で与えられる入力には個人差もあり，入力されるデータは，質的にも量的にも不十分であるにもかかわらず，生後わずか数年で個人差のない等質の母語文法に至る。その母語の文法に基づき，幼児は，自ら，誰からも聞いたこともないような文すら，創造的に生成する。

母語の特性や言語にある普遍性(universality)や変異性(variations)は，いずれも基本的には普遍文法によって規定されている。世界の言語は，人間の生物学的特性を反映するものであるから，共通する特性を多く担う。しかし同時に，世界の言語は異なってもいる。そして言語間の相違もまた，人間言語の特性を反映する。Chomsky(1981)は，文法体系は，普遍文法の一部として生物学的に規定された「すべての言語に共通する原理」と「言語間の違い(言語の多様性)を制限するパラメター」から成ると考えている。人間言語の多様性は(複数の値を持つ)パラメターとして，人間の生得的な言語のメカニズムの中で規定されると考えられている。

本稿は，「原理とパラメターの理論」の枠組みで，幼児言語の事実と言語の多様性をいかに説明しうるのかについて概観する。幼児の誤用を詳細に研究すると，幼児は親も直接教えもしないのに，自らの普遍文法に基づいて，母語ではなく，他言語のパラメター値を自発的に試す段階がある。それは，母語体系のもとでは『誤用』とされる。すなわち，『幼児の誤用』とは，普遍文法に規定された範囲にある(母語以外の)文法の特性が表れたものであると考えることもできる。本稿では，文法的な誤用は単なる『間違え』ではなく，自然言語に存在する文法の範囲内で規定されうるとする提案とその根拠となる議論を紹介する。

2. small *v* に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

冒頭の(1a)の2歳児の発話にもどって，幼児の誤用とそのメカニズムについて考えてみよう。

(1) a.　今日の月をみて,「お月様半分に切ってるなぁ」と言っています。

この例では，2歳児が自然に発話する(1a)において，大人の文法で「切れている」であるべき動詞が「切っている」と他動詞で表されている。(1a)に見られる動詞の表れ方は日本語の大人の文法に照らせば，一見，『誤り』のように見える。しかし，言語を広く眺めてみると，自動詞と他動詞が同形である現象は珍しくない。なぜ人間が言語を獲得する段階でこの誤用が，自然発生的に起こるのかを考える手がかりとして，たとえば英語の *cut* や *pass* といった動詞のように，他動詞と自動詞が同形である場合があるという点が着目される。

(2) a.　John passed the ring to Mary

b.　The ring passed to Mary

(1a)に見るような誤用は，実は，日本語を母語とする2歳前後から4歳頃の幼児に広く見られ，日本語獲得の中間段階を表す代表的な現象である。(3)では，(1a)とは異なり使役の意味を表す動詞や他動詞が自動詞として表れている。(発話の後に記した(　)内はその文の意図された意味を表す。)

(3)　子ども：お父さん，膨らんで。(お父さん，風船を膨らませて)

父親：膨らんでじゃないでしょ，膨らましてでしょ。

子ども：ふくらんで。(膨らませて)　(鈴木 1987)

これは，子どもが父親に風船を膨らませてくれるよう頼む状況での発話を記述したものである。父親は，直接，動詞の形式が子どもの意図を表す動詞形ではないことを伝え，使役形「膨らませる」が大人の形式であることを明示的に教えるが，子どもはこの直接否定情報にもかかわらず，『誤った』非対格動詞「ふくらむ」を命令形の形式で産出し続けている。

この観察は，幼児の産出に誤用が在ることを記述しているに留まらない。幼児は，親から否定情報を直接的に与えられても，一定の時期が来なければ即座には修正できないことを，発話の状況とともに記述する極めて優れた観察記録である。

同様の『誤り』は2歳頃から4歳頃の他動詞と自動詞の関係においても見られる。

(4)　子ども(3;11)：おとうちゃん，まど　あいて。(お父さん，窓を開けて)

父親：窓開けてだろ？

子ども：うん，まど　あいてよ。(うん，窓を開けてよ)

(大津 2002)

(4)では，子どもが父親に窓を開けるように頼んでいるが，子どもは他動詞の「あけて」(開ける)の代わりに，非対格動詞の命令形「あいて」(開く)を産出している。

実のところ，幼児が自動詞と他動詞を混同するのは日本語特有の現象ではない。たとえば英語とポルトガル語を母語とする幼児が使役動詞や他動詞を自動詞で表す誤用があることを，Bowerman(1974)と Figueira(1984)は，それぞれ報告している。

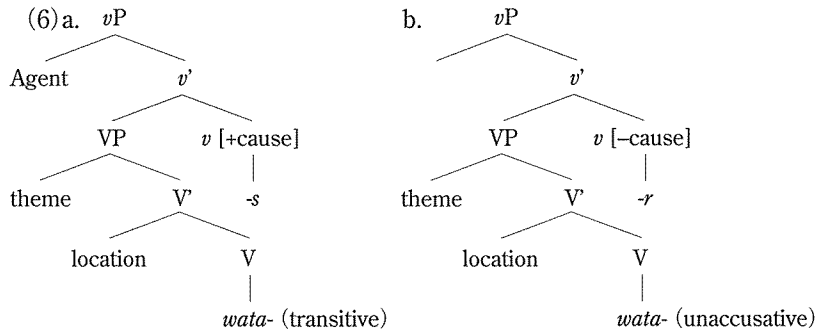
(5) a.　You can drink me the milk

b.　(…) este balance vai te　cair

this　swing　go　you　fall　'This swing is going to fall you.'

(5a)では子どもは母親に牛乳を飲ませてくれるよう頼んでいるが「誤って」*drink* が，(5b)では「落とす」とすべきところで「落ちる」に相当する動詞が使われている。但し，日本語の場合，膠着語であることから，幼児言語で「させ」「せ」「え」等の [±cause] を具現化する束縛形態素が落ちることが，明確に見てとれるのである。

なぜ，幼児は，(1a)や(3)–(4)のような発話をするのだろう。大人の日本語で，他動詞と非対格動詞は，(6)に示すように異なった接尾辞が伴う形式を持つ。Murasugi and Hashimoto(2004)ならびに Murasugi(2012)では，この動詞句類について，その大人の構造は，Larson (1988)，Hale and Keyser (1993)，Chomsky (1995) に従い VP-Shell 構造を持つという仮定に基づき，膠着語特有の(個別に習得される)動詞の接尾辞は *v*P の主要部に相当し，(6a)の「渡す」で *v* [+cause] は *-s*，(6b)の「渡る」では *v* [–cause] は *-r* として具現化されるとする分析を提示している。



では，日本語を母語とする幼児は，なぜ，自動詞とすべきものを他動詞に，あるいはその逆に産出するのだろうか。Murasugi and Hashimoto (2004)，Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007) ならびに Murasugi (2012) では，日本語の獲得段階に見られる他動詞(使役動詞も含む)と非対格動詞の交替について，先行研究に蓄積されたデータに加え，独自の縦断的研究に基づき，動詞獲得のいくつかの段階とその過程で広く観察される『誤り』について記述し，上記の VP-Shell 分析を与えることにより，(i) [±cause] の素性を持つ機能範疇の *v*(small v) は，言語獲得早期に獲得されるが，(ii) 幼児が *v* の(大人と同じ形態での)音声的具現化を習得するのに時間(年月)がかかるため，(iii) 幼児はある段階で，非対格動詞を他動詞としても用い，あるいはその逆に(頻度は低いが)他動詞を非対格動詞として用いるとする理論的説明を与えている。すなわち，幼児の日本語に広く観察される(3)–(4)のような『誤り』は，主語に意味役割を与える *v* がゼロ形態素であることが無標の値として仮定されることが一因となると提案している。

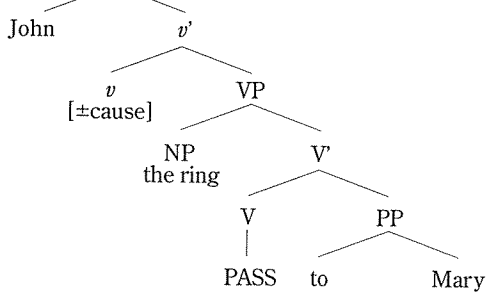
この幼児の言語獲得の中間段階に見られる『誤用』は，実は他の言語においては文法的であり，人間言語の多様性を表す証しともなる。大人の英語において，他動詞と非対格動詞はしばしば同じ音形を持つ。(2)の自他交替の例を(7)に再掲しよう。

(7) (=(2)) a.　John passed the ring to Mary

　　b.　The ring passed to Mary

もしこれらの項構造が VP-Shell 構造として(8)のように表されるとすれば，この言語では *v* は音形を持たない“ゼロ形態素”として表れると分析される。すなわち，(7a)では *v* は [+cause]，(7b)では [–cause] の素性のいずれもが，音形を伴って表されることはない。その結果，*v* [+cause]+PASS も *v* [–cause]+PASS も同形の *pass* として具現化される。

(8)　*v*P　(*v* [+cause] + PASS = *pass*, *v* [–cause] + PASS = *pass*)



このように考えると，(1a)や(3)–(4)に示された幼児の『誤り』は，(英語の大人の文法のように)他動詞と非対格動詞が同じ音形によって表される言語の特徴を示すものであり，そのような言語の一特徴が，幼児の言語発達段階にも顕在化したものとして考えることができる。この事例は形態レベルの問題ではあるが，幼児の動詞の『誤用』が，他言語において実際に可能な形式として具現化されうることを理論的に示唆するものであろう。

3.　時制に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

3.1　主節不定詞現象

前節に示したように，機能範疇の *v*(small v)が音声的にどのように表されるのかを獲得するには時間がかかる。しかしそれよりも以前の段階として，幼児は，動詞とその屈折(活用)の獲得において，大人とは異なった形式を表すようである。

幼児の『誤用』として言語獲得理論において広く研究されてきた現象の一つに，1歳から3歳頃の幼児が，主節内で時制を伴わない動詞形式を『誤って』発話する現象があげられる。フランス語，オランダ語，ドイツ語などでは不定詞が，英語では裸の動詞が，主節内で表れる。

(9) a.　Dormir　petit　bébé.

　　sleep-INF　little　baby　‘Little baby sleep.’

(Daniel, フランス語 :1;11)

b. Earst kleine boekje lezen.
first little book read-INF 'First (I/we) read little book.'
(Hein, オランダ語 :2;6)

c. Papa have it. (Eve, 英語 :1;6)

言語獲得研究史において，かつて，幼児の主節不定詞(Root Infinitives)の現象が，すべての言語において観察されるわけではないことが指摘されてきた。空主語(pro)を許さない英語のような言語においては主節不定詞現象が存在するが，空主語を許すイタリア語のような言語には主節不定詞現象は見られないと議論する論文が発表され，当該の言語が空主語言語か否かが，主節不定詞の有無と強い相関関係を持つとする提案がなされたこともある(Guasti 1993/1994 等)。日本語もその例外ではなく，日本語のように空代名詞を許す言語においては主節不定詞現象が存在しないとする仮説(Sano 1995 等)も提案されてきた。

このような提案に対して，南山大学の言語学研究センターを中心とした言語獲得プロジェクトでは，すべての言語において，初期の言語獲得の段階には，主節において時制(素性)を欠く動詞が表れる「主節不定詞」現象に相当する現象が見られ，当該の言語が空主語言語か否かが，その言語の主節不定詞の有無とは直接的な相関関係を持つことはないと提案している[2]。日本語では大人の文法にもヨーロッパ言語の不定詞形に相当する形式が顕在化しないものの，日本語獲得においても，いわゆる主節において定形ではない動詞が表れる「疑似主節不定詞」が存在する。

[2] 本論で概観する主節不定詞現象についての詳細は，南山大学言語学研究センターのホームページにも一部掲載されている。Murasugi (2009), Murasugi and Watanabe (2009), Murasugi, Nakatani and Fuji (2010), Sawada, Murasugi and Fuji (2010),Murasugi, Fuji and Hashimoto (2010), Murasugi and Fuji (2009), Sawada and Murasugi (2011), Murasugi and Nakatani (2011)等を参照されたい。これらの研究は南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻，南山大学言語学研究センター，そして国立国語研究所の活動の賜物である。本現象について共に研究を深めてきた仲間に感謝する。特に Luigi Rizzi 氏，Amritavalli 氏，Jayaseelan 氏，Diane Lillo-Martin 氏，William Snyder 氏，Bonnie Shwartz 氏，Kamil Deen 氏，Jonah Lin 氏，Peter Sells 氏，冨士千里氏，中谷友美氏，橋本知子氏，渡邊恵理子氏，澤田尚子氏，瀧田健介氏，河合道也氏，岸本秀樹氏，多田浩章氏，杉崎鉱司氏，斎藤衛氏との議論の時間はかけがえのないものであった。この場を借りて，深い感謝の意を表する。

さらに，日本語という膠着語であり格標示の豊かな言語の獲得を詳細に検討すると，「(疑似)主節不定詞」と称される現象が，実は二つの独立した時制に関する問題に起因することがわかる。1 歳代のそれは Rizzi (1993/1994)の提案するように，時制節が投射されていない時期である。一方，2 歳代のそれは，時制節は獲得されているものの，母語の時制素性の詳細が決定されていない時期であり，このとき主語への主格付与において『誤用』が表れる。これは，Schütze and Wexler (1996)の述べるところの AGR/TNS Omission Model(ATOM)仮説によって説明される現象である。以下，幼児の言語獲得の初期段階に観察される主節不定詞現象について概観する。

3.2 フェイズで「切り取られた」構造を持つ獲得段階

幼児の初期の動詞「主節不定詞」は，いわゆる不定詞形を持たない言語(たとえばギリシャ語)においても別の形式を伴って表れる。それらの特徴は言語を超えて共通し，主節不定詞は，たとえば要求や願望などを表すコンテクスト(Modal Context)において表れることが多く(Modal Reference Effects)，出来事を表すイヴェンティヴ動詞が時制(あるいは一致)を欠いた形式で産出される(Hoekstra and Hyams 1999)。また，同時期には幼児の「文」に空主語が多く表れ，動詞の屈折形が表れないだけではなく，補文標識(Complementizer)に関連する要素や助動詞や主格といった時制に関する機能要素も表れない。

日本語の「(疑似)主節不定詞」の「一層目」の段階は，1 歳代という早期に表れる。この段階では，日本語においても述語は時制などを表す形態を欠き，動詞の形式はいわゆる過去形の「-た形」で表れることが多く，形容詞は一貫して非過去(現在)の形式でのみ表れる(Murasugi and Fuji 2009, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010, Murasugi, Fuji and Hashimto 2010 等)。

たとえば CHILDES コーパスにおさめられている野地コーパス(野地(1973–77))に基づく日本語を母語とする幼児スミハレ(男子, 1948 年生まれ)の日記データ(縦断的自然発話観察記録)を詳細に検討すると，1 歳 6 ヶ月頃は，ほぼすべての動詞がイヴェンティヴなものであり「-た形」(典型的には過去を表す活用形)で表れる。幼児の「-た形」は，過去を表すためにも用い

られるが，(10)のように意志や要求，あるいは(11)のように結果相や進行相を表す場合もある。

(10)a.　あっち　いた (1;6)　　(あっちに行って / 行け)

b.　ちー　した (1;7)　　(ちー(おしっこ)したい)

(11)a.　ばば　ついた (1;6)　　(ばば(糸くず)が(指に)ついている)

b.　ちーした (1;7)　　((けいこちゃんが)ちー(おしっこ)している)

この時期には格助詞や動詞・形容詞の時制の屈折，補文標識に関する要素も観察されず，主節不定詞が発話者の要求や意志を表すコンテクストで用いられる Modal Reference Effects が日本語においてもみとめられるなどの点において，他言語における「(疑似)主節不定詞」時期の特徴と性質を一にする。

Rizzi (1993/1994)は，この時期は，幼児特有の時期として TP 構造よりも下の位置で TP とその上の構造を切り取ることも可能であると仮定する刈り取り仮説(Truncation Hypothesis)を提案している。大人の文のルート構造が CP 構造であるのに対し，幼児は，途中まで投射する構造を許す段階があるという仮説である。この仮説は，主節不定詞の表れる時期に，疑問文(C 要素に関する項目)や助動詞(T 要素に関する項目)が表れず，また空主語が多く表れる事実も統一的に説明し，さらに日本語についても説明力を持つようである。この時期，日本語においてもまた，時制を表す動詞の活用形のみならず，形容詞も活用形が一つ以上表れることがなく，(疑似)主節不定詞「-た形の不定動詞」と共起して，疑問詞(C 要素に関する項目)が表れることもなく，主語に「が」格も表れない(Murasugi, Fuji and Hashimoto 2010, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010 等を参照されたい)。

また，この時期，時制と関連する副詞も主節不定詞とは共起しない[3]。上記スミハレの分析において，(疑似)主節不定詞すべての動詞文において表れたたのは 1 歳 6 ヶ月頃であり，その後は，「ちゃった」形や「ちょうだい」形なども自然発話において併出する。しかし，1 歳後半頃まで表れる「-た形」には，前述したように Modal Reference Effects などの典型的な主節不定詞の特徴が見られ，動詞や形容詞の時制に関する活用形は生産的には表れない。

さらに，その時期には，「もう」「まだ」「あした」等の，時に関する副詞は，同一文内で動詞と共起しない。

(12)a.　もう。(1;05, 1;06)

b.　もう，ない。(1;09)

c.　まだ。(1;11)

d.　まだ，ぱん。(1;11)

e.　また，あた。(あした)(1;01)

この種の副詞が，同一文内で動詞と共起し始めるのは，非過去形(-る形)の形式が，異なる動詞において生産的に表れ始める 1 歳 11 ヶ月頃からである。このとき，副詞の音声的具現化は，(13b)に示すように，大人のそれとは一致しないことも少なくない。

(13)a.　もう，つんだ。(＝すんだ)(コンテクスト：便所で済むと，このように父に言う)(1;10)

b.　まだ，おちた。もっと，おちたよ。(コンテクスト：午前 7 時すぎ，床の中にいて，キャラメルをおとしたときに言う)(1;11)

(13b)に見るように，『幼児の誤用』の中には，「同じ統語的範疇」内で『誤って』音声的・語彙的に具現化される場合が少なくないが，副詞もまた例外ではない[4]。副詞が大人と同じような音形を伴って生産的に使用されるようになるのは，動詞の活用や主格が生産的に表れるようになり始める 2 歳以降である。

(14)a.　やっとねんねした。(2;2)

b.　まだあいてないよ。(2;1)

c.　かあちゃん，おちゃ，もうないよ。(2;1)

d.　いまさっきおったのくも，どこいった？(2;5)

e.　きのう，おふねがでなかったね。(2;9)

f.　きょう，なにゆったの？(2;7)

これらの事実は，(疑似)主節不定詞現象が，Rizzi(1993/1994)の述べるよう

3　ここでの分析は，主節不定詞が表れる同時期に，時に関する副詞がどう表れるかをみることがその時の幼児の構造を調べるのに有効である可能性があるとした岸本秀樹氏(2011 年 12 月 17 日，p.c.)による指摘に基づくものである。ここに示すコーパス分析は，岸本氏に理論的予測について示唆をいただいた折，筆者が南山大学言語学研究センター資料室にて資料を，さらに調査し整理しなおしたものである。ここに記して感謝する。

4　この時期，いわゆる「*wh*-句」(「誰」「何」等)の補文標識に関連する要素も，疑似主節不定詞とは，同一文内で共起しない。

に，時制句の投射のない時期，より最近の分析では，フェイズ(phase)ごとに幼児が構造を切り取る段階と考える上での記述的な根拠となりうるだろう。

では，なぜ「-た形」が日本語の「(疑似)主節不定詞」なのか。興味深いことに，大人の文法において，この「-た形」は，実際は，過去のみならず「(さっさと)帰った！帰った！」といった命令形としても表される。それは，イタリア語等で不定詞が強い命令形として使用される現象に通ずる。また「-た形」は，非現実・未然(「もしも私が家を建てたなら」)，あるいは出来事の結果(「小さく切った大根」)といった形態も兼ねる。そして，「行ったり来たりする/した」というように時制に関して無指定の形態素としても用いられる。幼児は，時制句を投射しない段階で，大人の文法においても可能な「不定形」としての「動詞の語幹＋た」の形式を，他の形態の代用形として用いていると考えることができる。

さらにMurasugi, Nakatani and Fuji(2010)ならびにMurasugi and Nakatani(2011)は，幼児言語の対照言語学的調査に基づき，いわゆる「(疑似)主節不定詞」の動詞の形態は，世界の言語を三分化すると提案している。裸動詞(英語，スワヒリ語等)の場合もあれば，不定詞(ドイツ語，オランダ，フランス語等)の場合もあれば，動詞の語幹にデフォルトの形態が代用形として付いた形式で表れる場合(日本語，韓国語，トルコ語，ルーマニア語，アラビア語，ギリシャ語等)もある。その言語獲得に見られる言語間の相違は，当該の大人の文法において，動詞の語幹がそれ自体独立した形態として成立しうるか否かの違い(Stem Parameter)と関係する。語幹がそれ自体では形態的に成り立たない [–stem] のパラメター値を選ぶ言語を母語とする幼児は，いわゆる「不定形」として，動詞の語幹に(当該の大人の文法での)デフォルトの形態を代用形として付ける形式を産出する。幼児はわずか1歳という段階で母語の動詞形態の体系の特性を反映した(疑似)主節不定詞の形式を選択するのである。Murasugi(2009)は，屈折や活用の豊かな言語の主節不定詞が，そうでない言語(たとえば英語)よりも早期に表れる事実を示した上で，Wexler(1998)のVery Early Parameter Setting(VEPS)の提案(語順や空主語等に関するパラメターは生後かなり早い段階で設定されるとの提案)の一部には，Stem Parameterも含まれ，幼児の母語となる動詞語幹が形態的特徴は，わずか1歳で設定されるパラメター値の一つであると提案している。

時制節を投射しない時期が，幼児の言語獲得の初期には存在する。このとき，幼児は一致や時制を欠く不定の動詞形式を産出し，主語名詞句には格が付与されず，助動詞や疑問詞も同一文内で共起しない。このとき幼児が選択する動詞形には，母語言語の特徴が既に反映される。わずか1歳という段階で，語幹の独立できる言語を母語に持つ幼児は裸動詞を，語幹の独立できない言語を母語に持つ幼児は不定詞あるいはデフォルトの形態を動詞の語幹に付けた動詞を，自らの(疑似)主節不定詞として，自然に，選ぶのである。

3.3　T(ense)の素性が未指定の時期

アスペクトを示す「ちゃった」「て(い)る」などが1歳代に表れた後，2歳前後には多様な動詞や形容詞にも時制に関する活用形が表れるようになる。この時期は，多くの言語で，(疑似)主節不定詞が随意的(optional)に観察され，かつ主語の名詞句に，大人の文法では許されない属格や与格が付与される段階でもある。

この時期について，Schütze and Wexler (1996)は，T(ense)の持つ素性(Agreement/ Tense)が未指定な段階であり，したがって，文の主語名詞句が，主格ではない『誤った』格に伴われて(たとえば *My do it, *Me want it などのように)表れると分析する。

この時期が，時制が投射されていない時期だとは考えにくい根拠はRadford(1998)による指摘からも独立に示される。たとえば2歳以降の属格主語の『誤用』が表れる時期には，英語において，助動詞も同一文内に共起している。

(15) a.　Oh, my *can't* open it by myself (Child 3, 2;6,)

b.　Can our do it again? (Sophie 3;0)

「主節不定詞」現象がヨーロッパ諸語を母語とする2歳頃の幼児に随意的に観察される頃，日本語を母語とする幼児もまた，主語名詞句を主格のみならず，随意的に属格あるいは奪格で格標示する『誤用』を示す。その時期は，多くの言語で主節不定詞動詞と同時期に主語の格が『誤って』表れる時期とほぼ一致する。そしてそれは，動詞活用形が大人と同じ形式でされるようになる後である。

(16)a.　もこちゃん　*の　ぎゅうにゅう　*の　ほしいだってさ
(もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ)(2;0)
b.　わたし　*に かたじゅけるから(わたしが片付けるから)(2;0)

この段階では，時制や補文標識に関する要素が表れる。紙面の関係で詳細は省くが，それは属格主語を大人の文法で許すインドに実存するドラヴィダ諸語の一部(たとえばMalayalam語やKannada語)や，与格主語を許す大人の文法でスカンジナビア語などに見られる言語の特性と性質を一にすると考えることができる。

「(疑似)主節不定詞」現象は世界の多くの幼児言語に共通に見られる『誤用』である。一段階目のそれは幼児特有の構造に因るが，二段階目のそれは，おそらくドラヴィダ語やスカンジナビア語の一部の大人の文法に相当する。幼児は，その時，ドラヴィダ言語やスカンジナビア言語のパラメター値を試している段階にある可能性がある。

4.　結びにかえて：自然科学としての『幼児の誤用』

幼児は無意識に普遍文法の道を辿る。言語獲得研究において，幼児が早期から普遍文法の特性を知っていることが示される一方で，幼児の文法的な誤用は，普遍文法の制限の範囲内で起こりうることも明らかにされつつある。母語の特性には，わずか1歳程度といった早期に獲得されるものもある。たとえば，母語の語順や，項脱落(主語や目的語などの項が音形を持たずに現れることができる言語現象)といった特性は，母語に触れてまもなく獲得される。しかし，母語のパラメターの値は，総じて早期に決定されるとは限らない。人間は，あらゆる言語の話者になりうるメカニズムを持って生まれ出ずるがゆえに，自身の母語に不必要な特性を「捨てる」過程も経うる。言語獲得の中間段階に，普遍文法に基づき母語とは異なる自然言語に許された文法値を仮定する段階があるとすれば，言語は学習や経験，構文パタンの推論のみにより習得されるのではない。そのとき，幼児は，世界の言語にある共通性と多様性を規定する生得的な抽象的システムと，言語環境にある母語の特性とを結びつけている段階にあると言えよう。

このように考えると，幼児が母語を獲得するとは，すなわち，成長の過程

で，母語の特性が具体的になんであるのかを決定するプロセスであることを意味する。Chomsky (1981)の枠組みで捉えなおせば，母語獲得とは，母語のパラメターの値がなんであるかを，世界の言語で許されるいくつかの値の可能性の中から選択することである。(冒頭に挙げた「の」の過剰生成のように)母語の値が当該のパラメターのデフォルト値でないとき，あるいは有標なもの(関係代名詞 *that*(の)を含まない構造)であるとき，その選択には時間がかかる。それが，現実の言語獲得は，瞬時的になされるのではなく，時間がかかるところの所以であると考えられる。

20世紀前半，科学者である中谷宇吉郎は，雪の結晶には多様な形状があることに注目し，それがいかなる気象条件のときにできるのかという視点から，気象条件と雪の結晶が形成される過程の関係を解明した。彼は,『雪』(岩波文庫)の中で，以下のように述べている。「さて，雪は高層において，まず中心部が出来それが地表まで降って来る間，各層においてそれぞれ異る生長をして，複雑な形になって，地表へ達すると考えねばならない。それで雪の結晶形及び模様が如何なる条件で出来たかということがわかれば，結晶の顕微鏡写真を見れば，上層から地表までの大気の構造を知ることが出来るはずである。そのためには雪の結晶を人工的に作って見て，天然に見られる雪の全種類を作ることが出来れば，その実験室内の測定値から，今度は逆にその形の雪が降った時の上層の気象の状態を類推することが出来るはずである。このように見れば雪の結晶は，天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の研究であるということも出来るのである。」

雪の結晶に多様な形状があるように，世界の言語にも多様性がある。その多様性もまた，人間言語に潜む原理的なメカニズムによって生じている[5]。この科学者のことばを借りるとすれば，言語学は自然科学であり，本稿で見た『幼児の誤用』もまた，天から送られた手紙であるということもできよう。手

[5] 本稿で引用する中谷宇吉郎の著作と自然科学者としての優れた知見，そして言語科学との関連については，北原久嗣氏の南山大学大学院人間文化研究科の集中講義(2012年9月12日)にてご教示いただいた。ここに，記して感謝する。

紙にある文章は，当該の幼児の「母語」である文法とは異なる文法に基づいて書かれている。その文法を読み解く仕事が，すなわち，人間言語の多様性のルーツを研究するということもできるだろう。

謝辞

本稿を発表するにあたり，酒井弘氏，渋谷勝己氏，白川博之氏，田川拓海氏をはじめ大会運営にご尽力くださった方々，論文に貴重な示唆をくださった学会誌委員会の皆様に，心から感謝を申し上げる。本稿は，国立国語研究所(共同研究プロジェクト)，科学研究費(JSPS #23530529))，南山大学パッヘ I-A 研究奨励金(2012 年度，2013 年度)により援助を受けている。ここに記して深く感謝する。

参考文献

Bowerman, Melissa (1974) "Learning the Structure of Causative Verbs: A Study in the Relationship of Cognitive, Semantic, and Syntactic Development." *Papers and Report on Child Language Development* 8, pp. 142–178.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris: Dordrecht.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Figueira, Rosa Attié (1984) "On the Development of the Expression of Causativity: A Syntactic Hypothesis." *Journal of Child Language* 11, pp. 109–127.

Guasti, Maria Teresa (1993/1994) "Verb Syntax in Italian Child Grammar: Finite and Non-finite Forms." *Language Acquisition* 3(1), pp. 1–40.

Hale, Ken and S. Jay Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations." In Ken Hale and S. Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honour of Sylvain Bromberger*, pp. 53–109. Cambridge, MA: MIT Press.

Hoekstra, Teun and Nina Hyams (1999) "The Eventivity Constraint and Modal Reference Effect in Root Infinitives." *Proceedings of BUCLD* 23, pp. 240–252. Medford, MA: Cascadilla Press.

Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction." *Linguistic Inquiry* 19, pp. 335–391.

Murasugi, Keiko (2009) "What Japanese-speaking Children's Errors Tell Us about Syntax." Paper presented at the Asian GLOW VII. English and Foreign Languages University, Hyderabad, India. February 28.

Murasugi, Keiko (2012) "Children's 'Erroneous' Intransitives, Transitives, and Causatives and the Implications for Syntactic Theory." Paper presented at NINJAL International Symposium: Valency Classes and Alternations in Japanese. NINJAL., August 4.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-movement." *BUCLD 33 Proceedings Supplement*. Medford, MA: Cascadilla Press.

Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2007) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language." Paper presented at the Asian GLOW VI. Chinese University of Hong Kong. December 27.

Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2010) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language." *Nanzan Linguistics* 6, pp. 47–78.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the *v*-VP Frame." *Nanzan Linguistics* 1, pp. 1–19.

Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto and Chisato Fuji (2007) "VP-shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives." *Linguistics* 45, vol. 3, pp. 615–651.

Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (2011) "Three Types of 'Root Infinitives': Theoretical Implications from Child Japanese." Paper presented at 20th Japanese/Korean Linguistics Conference. Oxford University. October 1.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fuji (2010) "The Roots of the Root Infinitives." *BUCLD 34 Proceedings Supplement*. Medford, MA: Cascadilla Press.

Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) "Case Errors in Child Japanese and the Implications." *Proceedings of the 3rd GALANA*, pp. 143–164. Medford, MA: Cascadilla Press.

Radford, Andrew (1998) "Genitive Subject in Child English [Electric version]." *Lingua* 106, pp. 113–131.

Rizzi, Luigi (1993/1994) "Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives." *Language Acquisition* 3, pp. 371–393.

Sano, Tetsuya (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*. Ph.D. dissertation, UCLA.

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) "A Theoretical Account for the 'Erroneous' Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense." *BUCLD 34 Proceedings supplement*. Medford, MA: Cascadilla Press.

Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2011) "A Cross-linguistic Approach to the

'Erroneous' Genitive Subjects: Underspecification of Tense in Child Grammar Revisited." *Selected Proceedings of the 4th GALANA*, pp. 209–226. Medford, MA: Cascadilla Press.

Schütze, Carlson and Kenneth Wexler (1996) "Subject Case Licensing and English Root Infinitives." *Proceedings of BUCLD 20,* pp. 670–681. Medford, MA: Cascadilla Press.

Wexler, Kenneth (1998) "Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage." *Lingua* 106, pp. 23–79.

大津由紀雄 (2002)「言語の獲得」大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則編『言語研究入門』179–191. 研究社 .

鈴木精一 (1987)「幼児の文法能力」福沢周亮編『子どもの言語心理 (2) 幼児のことば』141–180. 大日本図書 .

中谷宇吉郎 (1994)『雪』岩波書店 .

野地潤家 (1973–77)『幼児期の言語生活の実態 I ～ IV』文化評論出版 .

(最終原稿受理日 2013 年 7 月 10 日)